（管理規則第３条実施要領　別紙様式）

2025　年度（令和７年度）学校評価自己評価表

至誠中学校区	校番１９	福山市立熊野小学校
	最終更新日	2026年（令和8年）2月18日

Ⅰ　福山市

ミッション　福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン　各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

Ⅱ　中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容

- 義務教育終了段階の子どもの姿を共有し、教育活動の充実を図る。
- 小規模校の特色を生かした教育活動を推進する。
- 一人一人の個性を尊重し、多様性社会の担い手の育成に向けた取組を推進する。

児童生徒の現状

- 確かな学力の定着や学習習慣の確立及び基礎体力に課題がある。
- 積極的に挨拶をすることができ規範意識が高いが、自己肯定感が低い児童・生徒もいる。
- 自分で考えて行動することが苦手である。

育成する資質・能力	主体的に学び合う力
めざす子ども像（義務教育修了時の姿）	自ら課題を発見し、自分で考え、協働して解決することができる子ども
中学校区として統一した取組等	○授業づくり 単元で『身につけるスキル』を明確にした授業を通して、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。

Ⅲ　自　校

ミッション

確かな学力・豊かな心・健やかな体をもつ児童を育成し、
保護者・地域に信頼される学校

学校教育目標

自分が好き　友達が好き　学校が好き　理科が大好き

現　状

＜児童生徒＞
○児童アンケート　肯定評価
- 授業を通してどんな力が付くか理解している　92%
- 周りの人の役に立ちたいと思っている　97%
- 自分にはやろうと思ったことをやりきる力がある　91%

＜授業＞
○令和６年度全国学力・学習状況調査（全国）
国語科…70%（67.7%）　算数科…61%（63.4%）
○教職員アンケート
- 研究授業や研修を通して新しい授業づくりに挑戦している　１００%
担当児童や授業者の挑戦ポイントなどを指定し、研究授業を行ったり、教員間で授業づくりの挑戦について共有をしたりしたことが、効果的であったと考える。

育成する資質・能力		課題解決力	コミュニケーション力	粘り強さ
めざす子ども像	低	身近な生活体験から、自分の課題に気付いている。	友達の話をうなずきながら聞き、自分の考えを最後まで伝えている。	自分でやると決めたことやみんなでやると決まったことを最後までやり通している。
	中	課題解決の場面において、自己の課題に適した改善策を考えている。	自分の考えと友達の考えを類似、相違の立場で比べて聞いている。	あきらめずに、挑戦している。
	高	自己課題解決への計画、実践、評価、改善を繰り返している。	友達の考えに質問やアドバイスをしたり、自分の考えを相手が納得できるように伝えたりして、互いに認め合っている。	自分で目標を立て、主体的に目標達成にむけて行動している。

研究	テーマ	ふるさとと関わり、ふるさとを愛する熊野っ子の育成 ～獲得したスキルを活用できる学びを通して～
	内容等	・生活科・理科を中心に、【レディネス→スキルを明確にした授業→身に付けたスキルの活用（他教科等・日常生活）】の流れをもった授業づくりを行う。 ・身に付けたスキルを生かして地域学習に取り組むことで、地域の自然や文化を愛し、貢献できる単元開発を行う。
めざす授業の姿		・単元で身に付くスキルを意識しながら学習している。 ・単元の予習・復習の必要性や、身に付けた単元のスキルを活用する場面を考え、探究する学びの質を高めている。

Ⅳ　目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立熊野小学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価（10月1日） □指標に係る取組状況	プロセス評価	達成評価	改善方策	最終評価（２月末） □指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	プロセス評価	達成評価	総合評価	改善方策
3	主体的に学ぶ児童の育成	★	継続	生活科・理科を中心に、くまのステップの流れをもった授業づくりを行うことで、根拠をもって自分の意見を述べたり、自ら学ぼうとしたりする子どもを育てる。	単元を通して身に付けるスキルを児童と共有しながら学習を進め、単元末テストで70%以上到達の児童を7割にする。	・児童アンケート「授業を通して身に付けたスキルを他の教科で活用しようとした」肯定的評価80%以上。 ・理科を中心とした教材研究研修を行い、教員の教科、教材への理解を深める。	・児童アンケートでは、69%が肯定評価であった。単元のスキルを児童と共有しながら、授業を進めている一方で、児童が意識できるような手立てが不十分であると考える。また、スキルを活用しながら、自分の考えを述べることについては、課題がある。 ・校内研修では、理科を中心に実践的な研修を行っている。	2	2	・引き続き単元のスキルの意識づけを行うとともに、根拠をもって考えを書いたり述べたりする力の向上に向けて、授業の中で書いたり話したりする時間を多く設けるようにする。	・児童アンケートでは、89.3%が肯定評価であった。単元スキルの共有を継続することで、特に高学年は「今何を学んでいるのか」ということへの意識が高まってきた。また、2学期の期末テスト（理科）では、70%以上到達の児童は86.3%であった。一方で、獲得したスキルを活用して自分の考えを表現する力については、引き続き定着に向けた取り組みが必要である。 ・校内研修では、実践的な教材研究を行うことができた。	3	3	3	・単元のスキルを児童と共有することを継続するとともに、自分の考えを表現する力の向上を目指す。ノート、タブレット、トークなど、考えを表現する方法の選択肢を用意したり、ワークシートの様式を複数用意したりするなど、児童が自分に合った表現ができるよう、授業準備を行っていく。 ・校内研修については、引き続きワークショップ型の形式を取り入れながら進めていく。
			継続	地域の人、もの、ことを巻き込んだダイナミックな単元開発を行い、児童の興味・関心・意欲を引き出す。	上記の教材研究研修を含め、教材研究を中心とした研修を設定し、児童や教師の挑戦したいことを組み込んだ単元開発を行う。	・教職員アンケート「研究授業や研修を通して新しい授業づくりに挑戦している」肯定的評価80%以上。	・教職員アンケートでは、全員が肯定評価であった。本年度は創立150周年ということもあり、各学年が地域や学校の歴史などと絡めた学習を進めている。一方で、より具体的な単元計画を立てる必要性も見られる。	3	3	・実践的な校内研修を継続するとともに、総合的な学習の時間や生活科における単元計画をより具体的に立てるための時間を設ける。	・教職員アンケートでは、全員が肯定評価であった。低学年は生活科、中・高学年は総合的な学習の時間を中心に、地域の人、もの、歴史などに関わる学習計画を立て、学習発表会では学校全体でつながりのある発表を通して発信することができた。一方で、来年度に向けての具体的な計画については、これから練る必要がある。	4	4	4	・本年度の取り組みを整理するとともに、地域との連携を深めながら今後のカリキュラムを考えていく。また、児童が地域に出て課題を見つけたり調べたりする機会を多く設定し、単元の土台づくりを大切にした、探究的な学習を行っていく。
3	自己実現に向けて未来を切り拓く子どもの育成	★	継続	児童が活躍できる場、児童に任せる場を設定し、自己肯定感を高める。	・縦割り班掃除の取り組みを通して、下級生の見本となる場を設ける。 ・行事ごとにペア学年間で感想の交流を行う。	児童アンケート「自分にはやろうと思ったことをやりきる力がある。」 肯定的評価85%以上	・児童アンケートでは90%が肯定的評価であった。縦割り班掃除では、上級生が下級生に掃除の仕方を教えたり、6年生が主体となって掃除の反省を行ったりすることができた。 ・運動会ではペア学年での競技を取り入れ、異学年間での交流をしながら練習ができた。	3	3	・引き続き縦割り班掃除などを通して上級生が下級生の見本となって活動できるようにする。 ・運動会ではペア学年間での感想を話して伝えることができたので、発表会では、文字で書いて伝え合う活動を行う。	・児童アンケートでは98.1%が肯定的評価であった。縦割り班掃除では、継続して取り組んだことにより、上級生が主体になって掃除を進めることが定着してきている。 ・発表会後には、他学年に感想の手紙を書く活動を行った。前向きな言葉がよく見られ、児童の肯定感にもつながった。	3	3	3	・縦割り班掃除では、振り返りを全学年が順番に行うことで、どの学年も他学年の良いところが見つけられるようにする。 ・手紙の交流を学期末にも行い、普段の学校生活についても肯定しあえる機会につなげる。
			継続	元気な挨拶ができる。無言掃除ができる。	・委員会を中心に、朝のあいさつ運動を行う。 ・縦割り班掃除で、日々の掃除の振り返りを行う。	・児童アンケート「元気なあいさつをしている」 肯定的評価85%以上 ・児童アンケート「無言掃除をしている」 肯定的評価85%以上	・「元気なあいさつをしている」の肯定的評価81%であった。朝のあいさつ運動では、特に低学年の児童が元気なあいさつをすることができている。 ・「無言掃除をしている」の肯定的評価84%であった。無言掃除を行うことが児童の中で定着してきているため、児童間で意識し合いながら取り組もうとする姿が見られる。	3	3	・引き続きあいさつ運動を行うとともに、委員会を中心に、普段のあいさつも積極的に行えるよう呼びかけていく。 ・無言掃除を続けて行うとともに、掃除の手順やポイントなどを掲示して示し、すみずみまで掃除ができるようにする。	・「元気なあいさつをしている」の肯定的評価 90.6%であった。児童会と連携し、月の児童会目標に設定するなど、各学級であいさつへの意識が高まるよう取り組んだ。 ・「無言掃除をしている」の肯定的評価 92.5%であった。掃除の手順を掲示することで、どの児童も同じように掃除に取り組むことができるようになってきている。	3	3	3	・外部講師を活用し、正しい掃除用具の使い方を理解できるようにするなど、掃除に対する意欲向上につながる取り組みを行う。

３	子ども・保護者・地域に信頼される学校づくり	★	継続	児童の姿を丁寧に見取りながら対応し、児童が楽しく通える学校づくりをする。	全教職員で情報を共有し、関係者を中心に、組織的な取組を行う。	・保護者アンケート「わが子は、楽しく学校に通っている」肯定的評価９５%以上	・「わが子は、楽しく学校に通っている」と捉えている保護者は89.3%であった。昨年度の同時期の数値をやや下回っているが、総じて肯定的に学校への信頼を得ていると言える。	3	2	・児童の様子を的確に把握しながら接していくとともに、児童が、わかる、できるようになる喜びを実感できる授業をつくっていく	・「わが子は、楽しく学校に通っている」と捉えている保護者は95.4%であった。中間評価時は指標を 5%以上下回っていたが、指標を上回った。学習発表会やデニムの日の取組等で、児童が生き生きと学校生活を送ったことも肯定的評価が上がった要因の一つと考える。	4	4	4	・保護者、地域住民を巻き込んだ学校づくりを進め、地域とともにある学校として、保護者、地域住民の理解・協力を得ながら、児童に様々な学びの体験を提供するための連携・協働を図っていく
			継続	働き方改革を含め、組織の一員として学校経営に参画しているという自覚をもつ。	一人一人が業務を計画的に遂行し、時間管理を行う。 学校教育目標につながる計画を提案し、実践する。	・１８時３０分退校。 ・全員が学習効果のある新たな提案実践をする。	・個々が働き方を考えながら、業務を遂行することによって、全職員が１８時３０分までに退校することができている。また、１か月の時間外在校時間４５時間以内の職員は１００％である。 ・差異はあるが、全教職員新たな学びにつながる取り組み挑戦している。	3	3	・１８時３０分が退校時刻ではなく、自分の予定していた業務を終えたら退校する意識をより高め、働き方改革を進めていく。 ・放課後の時間を有効に使い、児童の学びにつながる教材研究を行う。	・時間外労働月 45 時間以内、18 時 30 分退校は、全ての職員が達成している。 １月から導入されたT-コンパスで入退校を管理することにより、個々のタイムマネジメント能力が向上していると捉えている。 ・教員同士切磋琢磨しながら学習効果のある新たな取組に挑戦しているが、教科によってはやや閉鎖的なものもある。	4	4	4	・年齢別に見て、バランスがよい組織体制とは言えないことにより、一部の教員に負担がかかっているため、負担軽減が必要である。 ・保護者アンケートによると、「学校は、わかりやすい授業を心がけている」の問いに対して肯定的評価が 100%であることから、今後も学習効果のある新たな提案・実践を継続していく。

［プロセス評価の評価基準］

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

［達成評価の評価基準］

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し，十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し，望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し，一定の成果をあげた。
2	目標を下回り，成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り，成果が認められなかった。

［総合評価の評価基準］

評点	評価基準	
5	１００％以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	８０％以上１００％未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	６０％以上８０％未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	４０％以上６０％未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	４０％未満の達成度	目標を達成できなかった。